

つたのは通信

特定非営利活動法人 としま遺跡調査会

駒込一丁目で新たな弥生時代遺構



弥生時代後期の溝状遺構（南から撮影）
右上写真が調査前、下が調査後の状況

6月に実施した駒込一丁目遺跡の発掘調査で、弥生時代の溝状遺構が発見されました。弥生時代遺構が発見された場所は、駒込駅の東南方向、小さな谷を見下ろす台地縁辺部の緩傾斜地上に位置します。

発見された溝状遺構は、南東部で直角に折れ曲がって調査区外へと続いています。また、北西部ではこれに係る溝状遺構の一部が確認されており、これらが一

連の遺構とすると、どうやら一辺 12 m 程（溝幅 70 ～ 110 cm、深さ 50 cm）で、隅の一箇所が橋状に残る方形区画になりそうです。方形区画であることは想定できましたが、ではいったいどんな施設だったのでしょうか。この問いに対しては、判断材料に乏しい現段階で答えを導き出す事は早計であると考えます。今後、付近の該期集落との関連性、および周辺自治体などの成

果と合わせた、巨視的な観点から慎重に検討していく必要があります。（高木翼郎）



【写真右】
弥生土器の出土状況。
土器は覆土の上部層から出土。

【写真左】
弥生時代溝状遺構（コーナー一部）の調査風景

本郷学園校内の発掘調査

当地は近世に津藩藤堂家下屋敷の一角にあたります。

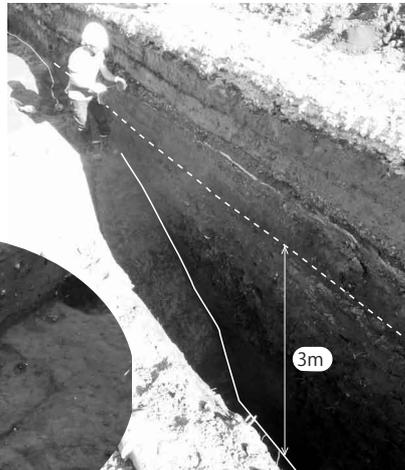
今回の調査では、非常に大きな遺構の一部が発見されました。確認できた範囲だけでも遺構の幅が優に10mを超え、深さは3mもあります。底面・壁面はともに平坦につくられています。壁の一部は崩落が進んでいましたが、本来の勾配は約70度であったことがわかりました。限られた範囲でしか調査していないため遺構の全容・性格は不明なのですが、覆土中には焼土塊（建材か）や瓦が大量に含まれていることから、廃棄土坑として利用され埋没に至ったようです。

また、大型遺構から東方へ30m離れた地点では、石や瓦片を使用して構築された堅固な建物基礎が1基見つかっています。矮小な調査範囲ではこの1基しか見つかりませんでした。さらに調査区外へと広がりを見せることは間違いありません。この遺構の発見は、石場立ての建造物が存在していたことを窺わせる

とともに、この辺り一帯が建物空間であったことを指しています。未検出である下屋敷の御殿を探る上では重要な手掛かりになりそうです。

（高木翼郎）

→発見された大型遺構。深さが3mもある。



←石や瓦片を使って堅固につくられた建物基礎の一部

としま未来文化財団 文化カレッジ

兵（つわもの）達が残した遺産

昨年度人気を博した講座「中世の城や館を歩いてみよう～東京近郊の中世城館を訪ねて～」が、今年度も、橋口定志を講師として始まりました。

城歩きの前準備として、第1回目（5月12日）は、豊島区立勤労福祉会館において、中世の城館についての基礎知識や、巡検における注意事項などの説明が行われました。

講座第2回目（6月9日）、まず訪れたのは、片倉城址公園（八王子市）です。片倉城は、湯殿川が流れる小比企丘陵の東端に位置しています。15世紀



片倉城巡検の様子

後半～16世紀前半の城とされ、公園内では3つから成る郭に、土塁や塹堀などの遺構を見ることが出来ます。昨年度の講座でも1番最初に訪れており、中世城館を学ぶには格好の場所です。激しい雨の降中でしたが多くの受講生が講座に参加され、説明を熱心に聴き入っていました。

7月14日に行われた第3回目では、横浜市都筑区の茅ヶ崎城に行ってきました。茅ヶ崎城は、7次に渡る考古学的調査が行われており、15



茅ヶ崎城：堀底道での解説

世紀後半を中心として構築された中世城館の構造が明らかになっています。当日は前回から一転、非常に暑い日でしたが、木々に覆われた城内は意外にも涼しく、受講生の方々は夢中になって城内を回られていました。



茅ヶ崎城：体で感じる遺構の規模

ちなみに、茅ヶ崎城は、史跡公園としてきれいに整備されており、遺構の形状や規模が把握しやすいため、城巡り初級編としておすすめです。

次は現在放送中、大河ドラマ「平清盛」の一場面に登場した源義賢の館跡（埼玉県嵐山町所在）などの巡検報告をする予定です。（榎本邦人）

書籍紹介



古城巡りが一段と盛り上がる

伊禮正雄著 『関東合戦記』

以前から「面白いんだよ」と聞き及んでいた本書を、偶々古本市で見かけた。目次を見るや購入を決意し、読み始めると、血湧き肉踊る面白さで、これを著した伊禮正雄という人物にも惹きつけられる、迫力に満ちた一冊であった。まずは目次である。

「序曲 王ナラズ、王子ナラズ、我ハタゞ……」

「終曲 ばとうろくろすモマタ死セリ……」

序曲は、フランス北東部にあるクシー城という古城の主の家に伝わった家銘に、終曲はトロイ戦争に取材した『イリアス』の英雄アキレウスの台詞に由来する。

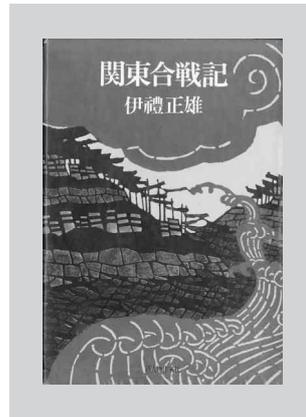
本題の章ごとのタイトルは例えば次のようなものだ。

「第五章 有名だからといって真実であるとは限らないこと（河越夜戦）」

「第六章 一度荒城に上れば万里の愁あること（松山城と杉山城）」

内容は、関東一円の合戦場、古城址など9か所をとりあげ、その戦に関わった人間の（または人間性の）物語を、伊禮が語るというものである。北条、上杉、小田、里見、武田といった武門の人が、家門のため、あるいは意気地のために戦った痕跡を伊禮は丹念に取捨して収拾し、行間を読み、人間性を洞察して力強く記述する。

「この書状に脈打っている颯爽たる律動（リズム）には、実に額に刀身を当てて「八幡戦に勝ったぞ！」と叫びたい当年五十歳の彼（筆者註；北条氏康）の、少年のような興奮が躍如



関東合戦記
伊禮正雄著
新人物往来社
昭和49年初版発行
¥980

として表現されているのである。」（第三章）

「このとき、彼（筆者註；山内と戦い勝利したものの、敵を深追いた扇谷定正）は、敵方にある太田資康一彼が殺して終生後悔した股肱の臣道灌の嫡子一の姿をふと目にして、その姿に父の幻を見、思わず手綱を取り落して河原の上に転落したのではなからうか。」（第六章）

伊禮正雄は、巻末の略歴によれば、大正11年沖縄県那覇市に生まれ、哲学・歴史を独修した城郭研究家である。生地、生年を見れば戦争と無縁であったとは思われない。しかし本書でその体験に触れることはなく、「あとがき」において自らを「学究」と説明し、「学問的根拠を重んじたい」立場にあることを強調する。中世城郭研究の資料として批判的に読みこむのも良いが、まずは、一人の「学究」の目を通して描かれる戦乱の巷に身を投じてみてはどうか。（成田涼子）

【編集後記】

●茅ヶ崎城中郭の土塁を前に勇み立ち、駆け上っていた自分がありました。しかし、矢や石が降り注ぐことを考えると城を攻めるのはなかなか難しい。



●日頃から節電を継続している当会は、今夏も節電を実施。節電目標は20%！酷暑にならないことを祈る。（翼）

編集・発行

特定非営利活動法人
としま遺跡調査会

〒170-0002 東京都豊島区巢鴨3-8-9 巢鴨複合施設201号室

Tel・Fax 03-3915-6962

E-mail tics389@a.toshima.ne.jp

ホームページアドレス：<http://www.toshima-iseki.org/>

「つたのは通信」の由来：蔦は大きな樹ではありませんが、生命力が非常に強い植物です。この蔦の葉が周囲の樹木や建物につたい茂るように、多くの人に遺跡の楽しさ、大切さを知ってもらいたいとの願いを込めて会報の名としました。また、染井遺跡を代表する大名屋敷である津藩藤堂家の家紋としても、馴染み深い植物です。

題字：湯澤和子

ロゴデザイン：石原幸

イラスト：千葉弘美